

昭和三十四年九月二十五日 第三種郵便物認可
（毎月一回、十五日発行）

（通第一二六号）

慈

光

第十一卷 第九號

目 次

正 信 偈 私 解……………	白 井 成 允……………(18)
た だ 念 仏 して……………	花 田 正 夫……………(13)
善 知 識 を 訪 ね て……………	福 島 政 雄……………(9)
繫 縛 と 解 脱 (一)……………	近 角 常 観……………(1)

繫縛と解脱 (一)

近角常観

一、繫縛と解脱

今日の題は「繫縛と解脱」であります。縛は「つなぎしる」という文字で、私共が日夜に煩惱のため、繫縛られて居る様を申すのである。又解脱はそれを解き、脱れた処であります。

処で、こは外ではない、我々の日々の日暮しなるものが、皆煩惱のため日夜に三界、六道に繫縛せられて、一寸の動きも取れぬ処が、繫縛の有様である。「和讃」にもこの意味のお言葉は度々用いられてある。先づ曇鸞大師讚には

四論の講説さしおきて本願他力をときたまい

具縛の凡衆みちびきて 涅槃のたどにぞいらしめし

ここの具縛というのが、煩惱のためにくくられてると言う事である。親鸞聖人はこれに

具縛というは、煩惱具足の凡夫ということなり。

との御左訓を施されてある。又『浄土和讃』の初めには
清浄光明ならびなし、遇斯光のゆえなれば
一切の業繫ものぞこりぬ 畢竟依を帰命せよ
業繫というのが、業のために縛られてると言うことである。これにはまた

罪業のつなというなり。

罪の繩にしばるるなり。

との御左訓がある。又善導大師讚には

仏法力の不思議には、諸邪業繫さわらねば、

弥陀の本弘誓願を、増上縁となつたり。

これには

もろくの悪業にさわりなし。

との御左訓があつて、即ち我々、斯く日夜悪業煩惱の綱に縛られ、くくられて、一寸の身動きもならぬ処が、悪業の繫縛であります。

二、『歎異鈔』の十三章

ところで今日何故これを話すかと言うに、私共日々の日暮しを初めとして、大にしては生死問題に至るまで、総て私共のなすこと、する事に、万事万端、この煩惱に縛られ、業報にくくられ、一寸も自分として動けぬのが、私共日常生活の有様である。

それは、我々が今現在、かくの如き状態にあるは、総て過去世の業報に縛られて、この如き有様があると、自ら思ひなすことを言うのでは無い。むしろ我々が思うようにしようとするも、この業報に縛られ、くくられて、思うように出来ないことを話したのであります。『歎異鈔』の十三章には、

よきところのおこるも、宿業のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも悪業のはからうゆえなり。故聖人の仰せには、卯毛羊毛のさきにいるちりばかりも、つくつみの宿業にあらずということなしと、しるべしとそ

うらいき。云々。
とありて、我々が善き心の起り、又悪事の思われせらるるも、総て宿業の計らう故である。我々は徹頭徹尾、業報に縛られて、卯の毛、羊の毛のさきにとどまる塵ばかりも、自分の思うようならぬと示されたが『歎異鈔』十三章の御教化であります。

三、我々の「こう仕度い、あ、仕度い」の心

そこで今、これを適切に申すに、かく皆様が、ここに御来聴下さるは、それぞれ各人々に種々の思召あつての事であるが、遠慮無く申すに、一番皆さんの思われるは、信仰問題で言うならば「どうかして信仰を得たいものだ」という事を思うて来らるるのである。

又すでに信者の方にする時は「自分はもうお慈悲の事は充分聴き、弥陀の本願は分かつて居るけれども、どうもすこし喜べぬ、どうかも少し喜びたい」と思うて来らるるのである。

又青年者にする時は「信仰を得ると日常の行動を真面目に行う事が出来、立派な人格に到る事が出来る故、そうなりたい」と思われる方もあろう。

又、人生上に人知れぬ苦勞があつて求めらるる方は「自分ばかりこの世が思うようにならぬから、信仰を得ると心がらくになる故らくなりたいたい」と思うて来られる方もあ

る。
要するに各人各様に、それぞれ「こう仕度い」「あ、仕度い」の思い一つで来らるる事と、こは私の方よりそう思うのであります。

又平素、個人で聞きに来られる方にして見ても、信仰に熱心な方の何れも皆言わるゝは「自分はどうも喜びが足ら

ぬ。喜べぬ。お慈悲が真に頂けたのなら、もつと善く出来
そうなるものであるに、善く出来ぬ。これはお慈悲が全く頂
けて無いのか知らん」と、言われるは、矢張り、同じく
「自分が善く出来ぬ、もつとよくなり度い、よく喜び度
い」が問題となつて居るのである。

又、病人は病人で、皆、病氣をよくなり度いと思つて居
る。処でその思い通りに皆善く出来るかと言ふに、善く出
来ぬ。茲でこの「思うように善く出来ぬ」を軽い事に聞くと、
縛られて居る味わいが得られぬのである。我々は何事も
思い通りに、喜ぼうと思つて喜べ、かく仕度いと思つて
その如く出来、自分で自分の身が思い通りに自由になるか
と言ふに、自由にする事が出来ぬ。その出来ぬ所が、是れ
縛られてるのである。今の『歎異鈔』のお示しには

「卯の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりも、作る罪の宿
業に非ずという事なしとするべしと候いき。」

とある。すると、いや今日学舎に行こうと思つて来た故、
縛られて居ぬと言わるかも知れぬも、はやそれが、行か
うという考えに、縛られ、くくられて居るのである。かく
して卯の毛、羊の毛の先にいる塵ほども、縛られて動くこ

従うと答え置きながらも、思い懸けなく、千人殺せと言わ
れたら、一人も殺すこと出来ぬであろう。一人も殺せぬと
いうは、如何に汝自身では、思うよう出来ると思つて居て
も出来ぬではないか」と。……之は私共、今日は学舎に
行こうと思つて居ても、何か出来る、何程行きたいと思
つて、も行けぬのである。又如何程人を助けたいと思つて
も助ける業縁が無いと如何程苦勞しても、助けられぬ。若
しや私共、心任せに物事が出来るものならば、往生のため
千人殺せとある上は、信する人の言葉通り殺されそうな筈
であるに、夫れが出来ぬ。その出来ぬは、

「一人も殺すべき業縁なきによりて、害せざるなり。わ
がこころのよくてころさぬにはあらず。」

我々殺さぬは、自分が善いからだと思つて居るのであるけ
れども、自分の心が善くて殺さぬのでは無い。殺すべき業
縁が無いから、殺せぬまでの事である。そのかわり、

「また害せじと思つても、百人千人をころすこともある
べしと、仰せの候いしは、我等がこころの善きをば善し
と思ひ、悪しきことをばあしとおもひて、本願の不思議
にてたすけたまうということ、しらざることを仰せの
そうらいしなり。」

すれば我々の善き事をすれば善いと思ひ、悪しき事をすれ
ば悪しと心配している、この善悪の日暮しなるものが、皆

と出来ぬが、私共日常の有様であります。

四、人を千人殺してんや

処が私共平常、縛られて居ると思つて居るかと言ふに、思
つてやせぬのである。誰しも、「どうかしたら少し善く
出来よう、悪が止められよう、少し自分が何とかしたら
善くなれる」と、此の縛られて居る事を知らずに、忘れて暮
して居るのである。

ここにおいてか、親鸞聖人の『歎異鈔』十三章の御教化
が出て来るのであります。聖人が唯円坊に対して仰せられ
るには

「唯円坊、我が言うことを必ず違ふまじきか」と。

聖人の仰せであるから、唯円坊、謹んで「必ず、仰せに従
います」とお受けしたら、意外にも聖人は、

「たとえば人を千人殺してんや、然らば往生は一定すべ
し。」

余りに思いがけなき仰せ故、唯円坊、

「仰せにては候えども、一人も此の身の器量にては、殺
しつべしとも覚え候と、もうして候いしかば、さては
いかに、親鸞がいうことをたがうまじきとはいふぞ」

すると聖人は「汝必ず言うことを聞くといいながら、親鸞
が言葉通りに出来ぬは何故であるか。汝が仰せ通りにする
と言つたのは、必ず汝の本心からであろう。本心から必ず

業報にくくられて、かかる日暮しを嘗みて居るのである。

今、親鸞聖人のこの御教化によりて頂くべきは、外では無
い。人間は何程自分で仕度いともがいても、出来る可き業
縁無ければ、何としても出来ぬ。又そのかわり、自分が何
程せずに置こうと思つても、思わざることをする事があ
る。故に我々は自分が善いから善をなし、自分が悪いから
悪を犯すのではない。善いも悪いも人間は、一切業縁に縛
られて、一歩もその外に出られぬ身の上である、というこ
とであります。

五、「悪しくてはいかぬ」で解決の時あるか

処でここで一寸申すに「自分の如くこんな悪しくては
いかぬ」は、世間の道德の立場から言つと、非常に善い
のである。「悪しくてよいのだ」は、道德の上から考へる
と甚だよろしくない。

世間往々、信仰を聞きぞなつて、信心の上からは、悪
しくてよいのだとなると、倫理の教えとは全く正反對で
ある。併しながら、その道德的なる「こんなに悪くてはい
かぬ」で解決がついて居るかと言ふに、ついて居やせぬの
である。「可かぬ」から何うするか「止める」のである。
しからば、それが止められるか。止められぬ、と、もうこ
こで衝き当つて居るのである。

かくして「止めるのぢや」、「善くするのぢや」と言い

つつ「何うも可かぬ」と、みんなが、何時までも苦しんで居る。これがくくられて居る処なのである。

処がくくられながら、みんながくくられて居る事に気がつかぬ。矢張り何処までも自力で行く根性があるもの故、「もつと喜び度い。もつと善く仕度い、何時までも生きながらえ度い。あゝ仕度い、こう仕度い」と。

それでいつかは善くなれるかと言うに、何時までも善くなれず「出来ぬ」と苦しむとなつて居るのである。ここで能く頂かねばならぬのであります。

六、出来ぬ事が出来るようになるのでは無い

又従来説教を聞きつけて居る人は「何事も前生よりの宿業故、かかる業報の身と諦らめ覚悟するが仏のお慈悲である」という風に言われる。

成る程、結果から言うるとそれに違わぬも、人間は初めから、自分は前生よりの約束で、業報に縛られ、自由に出来ぬものと諦め、それで安心がつくかというに、つかぬのである。我々は思うように仕度いが腹一杯で、それが出来ぬため苦しんで居るのである。其処でどうなるか、

ここに片方に仏のお慈悲で解脱するという事がある。すると「お慈悲頂くと、その出来ぬ事が出来るようになるのか。死ぬると思うと怖いのが、お慈悲頂くと死ぬのが怖く無くなるか。今迄困つて居た我々の罪咎が、お慈悲頂くと

一念に、消えて善くなるか」と、直ぐそう云う風に取らる。夫れ故お慈悲が頂けぬのであります。成る程我々今言う如く、業報に縛られ、一步も善く出来ぬ者であるが、その業報の繫縛を解いて下さる仏のお慈悲は、直ぐ其の者をそのまゝ善くしてやる。その儘未来を明らかにしてやるの仰せではない。ここを能く頂かなくてはならぬのである。

七、出来ざる処を哀れみ給うお慈悲

どうかというに、仏のお慈悲はそれとは全く逆さまなのである。仏の方では「汝自分では立派に出来ぬも、仏の方より立派に出来るようにさせてやる」との仰せでは無い。寧ろ私が、かく業報に縛られて悩み苦しむ、立ちても居てもあらぬ心中を、仏の方より能く御覧下されて、……我々自分で善くすべきが当り前であるに、それがかく善くならぬで実に苦しい、その苦しき縛られ居る有様をよく御覧下されて、……その苦しんで居る者、それ程悪業のひどい者、それ程心の悪しき者を、よくも呆れず見捨てずして「汝がかく浅間しければ浅間しき程、親の心は汝の心中を察し、弥々遣る瀬なく思う」と、親の方より、私の心持ち、私の寄るべき思いを飽くまで知り抜いて、其の者を捨てぬとの遣る瀬なきお心を以て、向うて下されたが、仏の広大なる本願なのである。我々はこの遣る瀬なきお慈悲

に腹ふくらせて貰えばこそ「実に今迄得よう」とし苦しんで居た者が、あゝ然うではなかつた。丁度小供が、菓子欲しいと、自分の身の毒になる物を欲しがると同様に、今まで、あれ欲しい、こう仕度いと、三悪道に行きたがつて苦しみ悩んで居た者を、仏の方は飽くまで、この頼りすくなき、この間違つて居る心中を見抜いて、この悪しき心のやまぬのが実に哀れであるとの御親切であつたか」と、其の広大の思召し一つで、我々充分腹ふくらせて貰えるが実に仏のお慈悲なのであります。

なお分りよく言いと、皆さんが日常生活につけ、又生死問題につけ、皆様の苦しんで居らるる心中を私の方より察してお話するに、誰とて今自分がやつて居るような事ではないとは思つて居られぬのである。誰とて出来ることなら、「自分のためにこうもしたい、人のためにもかくしたい」と腹一杯思うて居らるるのである。けれども然う思うけれども、それが私の浅間しき心で、何うしても出来ぬ。出来ぬが、何処までも自分はそうしたい。そうしたいが、夫れが何程苦しんでも何うしても出来ぬ。というその出来ざる点を深く察し下されて「成る程、汝、人に対してはかくかく仕てやり度いとのおなきがあるであろう。又自分のために斯くしてはしいという要求があるであろう。無理もない、去りながらそれが出来ぬで、実に苦しかり、実に

つともである、哀れである」と、私の浅間しき、苦しき心のどん底までを見抜いて下されて、飽くまで其の者を見捨てず、呆れず、其の者のために涙を流して下さるというお慈悲の人だにましまさば、我々は、自分の思うようにならぬを、自分でどうしようではない。この三界にして見よう無き者を、それ程やる瀬なく思召す、其のお見捨て無きお慈悲一つで満足させて頂くが、仏のお慈悲に満足する姿であります。

八、分つて頂くお慈悲でない。

始終申すことでありますが、能く、仏のお慈悲の事を聞き「仏とは如何なる方であるか」と言われる方がありません。夫れ等の方に對して、此方は、仏のお姿は形で見るとは無い。お慈悲ばかりのお方であるとお話する。去りながら何程お慈悲ばかりのお姿と思つて居つても、それが矢張り肝腎の仏のお心を聞かないで、唯こちらで思うて居るのでは駄目なのであります。処が真にお慈悲を聞いて見ると、こちらから仏が分つて、仏のお慈悲を頂くのでは無い。信仰の上から申すと、寧ろ仏が分つたり、未来が明らかになつて頂いた信心なら駄目なのであります。そんな信心なら、せつばつまるど皆碎けて了るのであります。処が、今斯く、何れの行も及ばぬ、一分一厘自分では動けぬ「其の汝の身を悉く知り抜いて、

其の爲に現われた汝の親であるぞ、その汝が可哀想で飽くまで見捨てぬのであるぞ」と、此のお見捨て無きお心を聞かせて貰うて見ると、仏のお姿や形や、乃至南無阿彌陀仏の謂れが分つて頂くのでは無い。

他無し「今自分の如くこれ程苦しみ、これ程衝き当り、一分一厘動かれぬ此の者を、思い懸けなく、この者を哀れみ給わる一人の親ましまして、この私の苦しき処、浅間しき点をこらず知り抜いて、しかも飽く迄見捨て給わざるお慈悲でましましてしか」と、ここで頂くのであります。

九、「若手そくばくの業をもちける身にありけるを」

殊に日常生活の上より言うと、人間は妙なもので、誰でも、自分が悪いと思うて居やせぬのである。

「自分はこれでも一生懸命にやつて居るのである」

「自分は何処までもまことやつて居るのである」

と、設たえ形では善くいかなくなつた時でも、心には必ず此の気持があるのである。それ故、その自分の思いをよく人に理解されぬ時は、此の胸を断ち割つても、人に自分の思いを知らせ度い、との愚痴が出てくるのであります。

其の時は、何故そのように不満足であるか、何故人生が不充足であるか、と言うに、その自分の心中を知つて呉る人が無いからである。

もしく

それ故、そこへ一人の人が来りて「お前とて悪い積りであるか、かかる事をしたのでは無かろう」と、……警へえば監獄の囚人が、監獄で自分の犯した罪に泣いて居る。其処へ一人の人が来て「如何にも汝のした事は善くないが、汝とて初めから、悪い事をしようと思つてしたのでは無かろう。汝とてさんざ止めようと骨折つたが、遂に止めることが出来なんだのである」と、自分で自分の心にして見よう無き処を、向うの方が知り抜いて「如何にもそれが辛いであろう」と、此の心の最も苦しき処をば、向うより先きに言ひあてられた時は、もう此方であれこれ思ふ事は無い。「如何にもその通りで御座います」と、此方の頭が下りて、其の情けある人の親切一つに満足するとなるのである。

又生死問題にしても、矢張り然うなのであります。我々弥々死ぬるとなる時、仏のお慈悲を聞きて、行く先きが明るくなり、向うに極楽があると分りて、其処に安心するのでは無い。矢張り死ぬるとなれば、死ぬのは怖く、心淋しい、別れ度く無い。其の業報にほだされて、悩み、苦しみ、仕て見よう無き者を、

仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は、斯くの如きの我等がためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおほゆるなり。

仏は「其苦悩のあるのが可哀想である。其の悪い心の止ま

る。欲深き心に外ならぬのである。

未完

ぬのが哀れである」と、一に大悲の親様は「我々がかく業報にくくられてのがれえぬ処が哀れである、悪業に繫縛せられて動けぬ様が不惑」との広大の御哀れみより、我々の苦しき胸中を、残らず照らして下さる遣る瀬なきお慈悲にまします。すれば、我々の頂く処は、何処であるか「歎異鈔」のお言葉には

弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にありけるを、助けんとおほし召し立ちける本願のかたじけなきよ。

是れ程までに業の深き、浅間しき私の心を知り抜いて、其者を見捨てぬと、かくまで長々御心配なし下されたる、其の思召しの深きが有難いのである。

若し私が自由になれたり、「らく」になりたり、喜べたりするならば、こちらはすでに自分の力で、どうにでも為し得るのである。すれば仏が哀れみ下さる場所が無くなつて仕舞う。仏の御哀れみは、「汝が不自由だから自由を与えよう」、「汝が無能だから能力を与えよう」、「汝が困つて居るから、金を遣つかわそう」、「死ぬと困るから極楽にやつてやろう」との仰せでは無い。かゝる「極楽に往きたい」「喜び度い」「人格を高めたい」「らくになりたい」は、言葉こそ綺麗に使っているが、皆、私の貪欲の心であ

天下何の処か感謝なからん

筆をとりて感謝を描かんとす。天下何の処か感謝なからん、何物か感謝の資料ならざるべき。東籬の菊、深山の霜葉、何れか感謝の情を催さざるべき。

元祖聖人は天の星を南無阿彌陀仏と宜い、蓮如上人は衣の襟を御たきたきありて南無阿彌陀仏とのたまう。問うこと勿れ、何が故に然るか。答うること勿れ、某々の理由を以て然るなりと、吾人は唯々尽十方無碍の御恵と聞けば胸躍る心地し、芥子の地も捨身の処にあらざるなしと承れば、訳なくして涙おのずから溢る。

嗚呼筆も南無阿彌陀仏、紙も南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏。

(求道四卷六号近角先生法語)

明治四十一年十一月。

善知識をたずねて

福 島 政 雄

さて今度はその次の善知識であります。今、海雲比丘が次の善知識を勧めるのであります。又南の方に行くといふ十由旬、由旬という単位は私はずきりおぼえて居りません。相当長い距離であります。そうすると楞伽と言う道の片ほとりに一つの聚落とありますから村里であります。一つの村里がある。その村里の名は海岸という。そこにやはり一人の出家の修行者があつて、それは妙住比丘という名の人である。其処をたずねて行けと言われまして、一心に前の海雲比丘から説かれましたところの普眼法門を考えながら、今度は今の海岸という村里にまいりますのであります。そしてその妙住比丘を探し求めますとその妙住比丘は虚空の中であり、空中を行つたり来たりしている。そしてそれを仰いでみると本当に何とも云えない美しい世界が虚空に見えて来る。そうすると善財童子が又前の通りに尚ごまかにこの比丘に対して菩薩行の事を尋ねるのであります。それに対して妙住比丘は

「善男子よ、私は菩薩が遍く又速く勇ましく諸仏を供養して、そして、衆生を解脱させる、そういう法門を我が身に受けた上からの自分の心持を言えば、結局その如何なるものも礙にならない究竟無礙。そして衆生のあらゆる方面がわかる、あの衆生はどうだこの人はどうだ、一切の人々のどんな方面でもわかる、何のさまたげも無しにそれがわかる。それから自分に一種の神通力があらわれて来て、どの世界にも出たりはいつたりする事が出来る。そうするとどの世界にも仏様が現に悟をお開きになつて居る有様が見られる。そういう仏様方に供養する。自分はこういう法門を得ている。

遍く早く勇ましく諸仏を供養して、そして衆生の無礙の解脱を成し遂げる、そういう法門を得ているばかりである。他の事はわかりませぬ」と答えるのであります。

で善財は一人一人の善知識を訪ねたと次の善知識を訪ねて行く間に、まことに善知識の教を喜んで、そしてその心持がだん／＼深く広くなつて行くのであります。この場合にも真に善知識の教に従つて行く、正しく今の善知識から言われたところの法門をじつと心に考えて見る。そして清らかな心を以て深く立派な世界にはいつて行く。そして法を念ずる威力によつて仏様の行じ給うその通りに従うて行く様になつて、心を専らにしてその事を心に保つて行く、そういう状態になつて非常に嬉しく又次の善知識を訪ねてまいりますのであります。

こゝでちよつと振り返つて考えて見ますと前の二ツが山と海でありまして次が虚空の中を行つたり来たりしている。これは不思議な事でありませけれども、私の例の解釈によればこの心の奥の深い心持を善財童子がその妙住比丘から受け取つたといふ事になります。それから虚空、美しい世界が虚空に見られるという所はどうでありませしようか。山から海から空、空という事になりますと無限、限りの無い世界という事になります。無限という言葉は私共口では申しませけれども、限りないという事は心にピタツと感ずる事は出来ないのであります。そうでありませしよう、月の世界まで飛んで行こうと言う事が問題になつて居りますが、月の世界まで行つて見たところが、或は火星まで行

つてみましたところが、まだ先には無限の世界がある。その無限という事は私共にはわからないのであります。どうぞどこまで行つても限り無いと云いますが、その限り無さという事は本當に心にピタツたりわからぬのであります。限りがあると考へてもそれから先は又どうなつて居るか、となりますから宇宙の事は結局わかりませぬでしょう。

それがこの空という事になりますのでありませしよう。それでありませから問題が空という事になりますと、非常に心の深い問題であります。そういう風に善財の心が次々に開かれてまいります。

そして今度はその次の善知識であります。又南の方の彌伽大士というのであります。大士と言うのは菩薩という事でありませ。彌伽大士というは、金剛層城というお城に居る、その彌伽大士を探し求めてまいりますとその人は人間の町の真中に居るのであります。町のまん中に高台の上に師子の座、立派な座に坐つて居る。今までは山だ海だ空だという事になつて居ましたが、今度は人間の世界という内でも町のまん中という事になりますのであります。善財童子が又この彌伽大士に菩薩行を細かに尋ねるのであります。そうするとその彌伽大士はにわかには師子の座から下に

おりて来るのであります。そして自分は物事を尊び重んずると言う菩提心によるが故に、道をたずねて来た善財の前に五体を地にすりつけて、「礼敬す」とありますからすつかり地面に平伏する様にして、彌伽大士が善財童子を拜むのであります。そして非常にやさしい声を出して讃め称えるのであります。

「実にいゝ、実にいゝ事だ。こういふ菩薩にはなか／＼遇えるものぢやない。こういう菩薩が世の中に出現する事は六つかしい」

と言つて善財を拜む。こゝは非常に尊いところであります。そして彌伽大士は善財の為に發菩提心という事の非常に功德があるという事を賞讃するのであります。それから彌伽大士は還つてもとの座に昇つて、その「面門」と言いますから顔であります。顔から色々な光を放つた。その光によつてそこに集つて来たところの衆生があつて、その衆生を光によつて教え導く。その後その彌伽大士が善財に告げますのには、

「自分は已に妙音陀羅尼光明法門というのを成就している。」

何と言いますか、実に妙なる声を引きしめた、そこに光明が出る。その法門を成就している。

「そして自分は一息の中に三千大千世界のあらゆる衆生

ます。それで善財が前の善知識にお別れして次の善知識に会いに行く途中の心持を、なか／＼詳しくお経に書かれてあります。これを少し申して見ますと、善財は一心専念という誠を以て色々な菩薩達の言葉、教、海、又無礙の法門というものを心に念じて、心にもう疲れた、厭になつたという事が無い。又心に執着というものが無くて清らかな智慧の門にはいつて普く十方の差別の世界に行き、普く十方の差別の仏様の御体を見てそしてその如来の智慧の光がその身に触れる。そして一切の未知の世界、一切の法界がまねくその善財童子の体に入り込むと云う様な心の有様になつて、非常に飲んで行くのであります。この間十二年、又十二といふ数が出ますが十二年を経て住林城に行くのであります。

そして其処で解脱長者を探し求めて、善財は「五体を地に投じ」とありますから地にひれ伏すのであります。そしてその解脱長者の両足を押し頂いて非常に敬いの心を現わし、それから立ち上りまして合掌し、なか／＼善知識にお遇い申すという事は値い難い事でございますと云う事を述べて、非常に詳しく聞法の志を述べたのであります。

その時に解脱長者は、過去に積み重ねて来た善根力によつての故に、又如來の威神力、自分がどうしたと云うのは無い仏様の御力の故に、又文殊師利菩薩の憶念力の故

の言葉がわかる。自分はジツと考えると三千大千世界の衆生の細かな秘密までがわかる。自分はこういふ法門を知っているだけである」

と言つて又次の善知識を勧めるのであります。

そうすると、どうでありますか。今度は光でありました。山から、海から、空から、空というところに無限という事になりますけれども、その空は暗いので無くて光の満ち／＼しているところの空、無限の光の前には一切の衆生の事がわかる。その光というものは勿論心の光なのであります。こゝまで来ると、然も人間の世界の中にすつかり交つていながらそういう光明法門といふのを成就している。そしてその光明法門成就している人、彌伽大士の態度は、非常に謙虚と申しますか、道を尋ねて来た人を拜むという様な事でありまして、何とも云えないいゝ氣持であります。それが三千大千世界を照すところの光、光によつて三千大千世界を明るくしている、と云う言ふところであります。これは信仰の世界でありました。非常に立派なところでありました。

それから又南の方であります。南の方のやつぱり一つの聚落とありますから村でありました。住林という所にいる解脱長者とあります。その善知識を訪ねて行くのであり

に、文殊菩薩が自分を思つて下さるお力の故に、この菩薩の勝三昧門と云う悟に入つて、その体にあらゆる仏の世界の有様を現わして見せる。こういう事になるのであります。そういう姿を解脱長者が善財に見せてしまひましてから、その三昧から立ち上つて、今まで心をジーンと静めていたその三昧の境地から安らかに立ち上つて、善財に告げて言われますのには、

「善男子よ、私は已にこの極めて深い又何物にも礙げられない莊嚴な解脱を得て居ます。そして自在にその境地に入つたり出たりする事が出来ます。そして自分の心では十方の仏様を見る事が出来る。そして自分は十方三世、東西南北上下四維その十方、それから過去現在未來の一切の如来の事がわかる。そしてこう言ふ事が自分にはわかつた。一切の仏様というものは自分の心から其処に現われて来られると言ふ事が自分にわかつて来た」

こう言ふ事を申しますのであります。

今お終いに申しましたところの「一切の仏は皆自分の心より起ると云う事を見ました。」という其処が私の心に触れましたのであります。つまり自分が一心になりますとその何方に向いても仏様を感じるといふ事になる。始めから申して居ります華嚴の思想ではもうあらゆる小さな微塵にまでも仏を感じ、仏を見ると云うのが華嚴の思想であ

りますが、直接の感じとして一切の仏は自分の心より起る——それはつまり自分の心が深くなつて、そして本當の自然なら自然、人間なら人間を謹んで見てそこに感謝が起

る、というところまで行けば、一切の仏は自分の心より起ると云う事になる。そういう処を言うのでありましょう。

「ただ念仏して」

——池山先生の御持言——

花 田 正 夫

私は池山先生に大正十一年春からお亡くなりになつた昭和十三年秋まで、十七年の間、種々とお育てを蒙りました。今年はずでに廿二回忌をお迎え申すことになりました。

の歎異抄の二章のかなめでありました。ここをかくまでにお勧め下さる先生は、御自身の四十二歳の時、信仰上の大疑團に逢着せられて、どうにもこうにも動きがとれなくなつた時、フト、

さて仏道に徹した方は、「このことひとつ」と云うところを味つて居られて、それを終生くり返される趣がありませが、池山先生の場合、生涯を通じての御持言は、

「親鸞におきては、ただ念仏して……」の一句が心に浮び、

「親鸞におきては、ただ念仏して、じゃ私も！」

「親鸞におきては、ただ念仏して、じゃ私も！」と全身心がこの御文にひきつけられて「親鸞」とあるのを

「池山」とかえ「よきひと」とあるのを「親鸞聖人」と心のうちで言い換えた刹那、恰も堤が切れて河水があふれ出

子細なきなり云々」

るように、念仏が口からドット出始めると同時に「あゝこれが信心なのだ」と自得せられました。それから

とも言われ、第三には、「ただ念仏」とは、人に信を勧める奥の手である。〃

「池山におきてはただ念仏して、弥陀に……、よきひと親鸞聖人の仰せを蒙つて信する……」

とも讃えられました。

と体解されて、これが先生の畢生の御領解となりました。然し先生はこの一連の言葉を更に手短かに縮められて

「ただ念仏」とも、「ただ念仏して」とも仰言り、時には

「親鸞におきてはただ念仏して」とも、或は「池山におきてはただ念仏して」ともおつしやいました。

「よきひとの仰せのきわみ」

憶えば先生の御生涯を貫くものは、親鸞聖人が法然上人から聞きとられた金言「ただ念仏して」をそのままわが御身の生命と頂かれて、そこに破闇と満願のおよるこびから、自然に熱い思いの一杯で、筆に口に「池山におきてはただ念仏して」を繰り返しく仰言つて、有縁の者を無限に悲引して下さいました。

又、阿彌陀經には十方三世の諸仏の証誠の中に「名号を執持して、若しは一日、若しは二日、……」

と一切衆生に勧められました。

「ただ念仏」の三面の味わい

「ただ念仏」を先生は三方面から讃仰されました。

第一には、

〃「ただ念仏」とは、よきひとの仰せのきわみである。〃

とも言われ、第二には、

〃「ただ念仏」とは、自身の信仰告白のかなめである。〃

又、大無量壽經では、十方の数限りのない諸仏が、阿彌陀仏の威神功德の不可思議にましますことを讃歎され、それを聞く人々が

「その名号を聞いて信心歡喜する者は即時に往生不退の身にさだまる……」

と説かれ、それ故に、淨土に生れる人々に上、中、下の三類があるけれど、皆一様に

「一心專念無量壽仏」

の姿を根幹とすると述べられてあります。
以上は、釈迦即弥陀、弥陀即釈迦、と大寂定に入られた
大無量寿経の御説法であります。

善導大師は、この大無量寿経の十八願のころを
「若しわれ成仏せんに、十方の衆生、わが名を称えて
下十声にいたらん。若し生れずば正覺をとらし。と。
彼の仏、今現在成仏し給う。本誓、重願むなしからず、
衆生称念すれば、必ず往生を得るなり」
と解説を加えられて「ただ念仏」の真実を説かれました。

大師は更に観無量寿経のかなめを
「一心に専ら弥陀の名を念じて、行住坐臥、時節の久
近を問はず、念々に捨てざれば、正定の業と名づく。彼の
仏願に順ずるが故に」

と、「ただ念仏」は「仏の願に順ずる」ことを証して下さ
いました。

この大師の眞言は、四十三歳の法然上人の胸をひらき、
「余が如きの下機の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔、
かねて定めおかるるをや」
と、悲喜の涙のなかに大師の玄意を頂かれました。

法然上人はここに、

「南無阿弥陀仏、往生之業は念仏を本と為す」
と如来の選択して下された本願の念仏を掲げて下され、更

ればそくばくの業をもちける身にありけるをたすけんと思召し立ち給ける本願のかたじけなさよ」と頂くところ
金剛信の樹立がある。法然上人は善導大師の義疏より四十
三才の時読みとられ、親鸞聖人は法然上人から、池山先生
は親鸞聖人からうけられたのであります。

高野の明偏僧都は、法然上人の念仏爲本の教をうべない
得ず、駁論を書かれていりうち、法然上人が天王寺の西門
で沢山の重病人の乞食にお粥を与えておられる夢を見ら
れ、嗚呼法然上人の勧める念仏は、何一つ消化する力もな
い胃腸の弱つた病人をあわれんで恵み与えるお粥の念仏で
あつたかと氣附かれ、やがて自分も亦大病人であると自照
されて念仏のお粥を我身にうけられたのであります。

その念仏は「義なきを義とす」るもの、「行者の行に非
ず、行者の善に非ざる」もの。如来廻向の念仏で「しかれ
ば念仏も申され候」のただ念仏であります。

他山の石として、禅家の例を引きますと、私の知人の一
人が印可を頂いたというので、考案はときくと「隻手の
声」であつたとのこと。そこでどう解いたのかときくと「隻
手の声は隻手の声で、加えることも引くこともいらぬ。そ
れを自分のはからいを出してこねまわして迷路に入るのだ
」と教えてくれました。

よき人の仰せを「ただ念仏」と聞いて、我身一人に頂く

に、求道者へのしおりとして

「それすみやかに生死を離れんと思わば、二種の勝法の
中に、しばらく聖道門をさしおきて、選んで浄土門に入
れ。浄土門にはいるには、正行と難行の中に、しばらく種
々の難行をなげうつて、選んで正行に帰すべし。

正行を修めるについては、正業と助業とあるなかに、な
ほ助業をかたわらにして、選んで正定業をもつばらにすべ
し。正定業とは即ちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず
生ずることを得、仏の本願によるが故に」
と判定されて、凡夫往生の道は「ただ念仏」ひとつにあ
りと説かれて、浄土の一門を開かれました。

親鸞聖人二十九の時、六十九才の法然上人に導かれて
「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」
と聞きひらかれたのであります。それをそのまま

「池山におきてはただ念仏して……」
と体解せられて、それが先生のいのちとなつたのであり
ます。

二、自信の表白のかなめ

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と、よ
き人の仰せのきわみを聞いて、「他力の悲願はかくの如き
の我等がためなりけり」、「親鸞一人がためなりけり、さ

ほかに別の子細のない念仏であります。

義なき義をとする念仏、ただ念仏こそは、如来よりたまわ
りたる信心であり、念仏であり、聖人と一味の信であり、
行であります。

三、人に信をすすめる奥の手

関東から生命の危険をも省みないで、はるばる京都の聖
人をお訪ねした御同行に向われて

「親鸞におきてはただ念仏して……」
と聖人の御自督のままをお答えになり、今生二度の
再会を期し難い、而も法の魔性、仏の怨敵に惑わされた者に
向つての唯一無二のおくりものがこの二句でありました。

○ 清沢満之先生のもとを、住田智見師と木津無庵師が訪わ
れた時、話が歎異抄の二章に及んで「親鸞におきては、た
だ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと云々」につき
先生曰く

「ぐず／＼して居るよりは、此德音に接して信仰の門に
入るべし。この御語を聞いて、人間なら任せることぞ」
と、「白毫の光」に述べていられます。

池山先生もまた「池山におきてはただ念仏して……」と生
涯語り続けられて、自信のままを告白せられて、教人信と
せられたのであります。

信の上の告白は万人をひきつけずにはおかない、不思議な力があります。磁石に引きつけられた鉄片が、又他の鉄片を引きつける趣に似て居ります。或は又、月に光は無いけれど、太陽の光照をうける時、地球上の夜の闇に月明りとなつて自然に光を放つにもたとえられます。

池山先生は、その光源をかえりみられて、水火の二河を歩む旅人に、西岸上の弥陀仏は

「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん。すべて水火の難に墮することを畏れざれ」と呼びかけられるが、

「一心正念」が「ただ」である。「直ちに來れ」が「念仏して」であると、読みとられました。

更に、弥陀仏の悲心の程を

「一心正念にして直ちに來れ、とは、オネガヒダカラスグキテキテオクレヨ、と訳してもあやまりではなからう」

と言われました。それはそのまま「ただ念仏」とお勧め下さる先生の心底に、滾々としてつきぬ、大いなる力があるがしがあつたと感佩して居ります。

先生はここに、やむにやまれぬ熱い心一杯から「ただ念仏して」を御持言とせられつゝ、それを聞く者が「私におきてはただ念仏して……」と、正しく我身にあてて、

決定して道をたずねて直ちに進んで疑悟退心のない時刻の利來を待ちに待たれたのであります。

若し誰かの上にそのきざしを発見せられると、先生は全身大歡喜の姿を現わされました。

その一つは、昭和三年頃、当時、甲南高校の学生だつた三男の幸吉さんが、急性腎臓炎で亡くなられる直前に

「私のこの世の仕事はもう終りました。これからはお念仏です。南無阿弥陀仏、々々々々々々。」

と、病床に馳せつけられた先生に語つて静かになだらかに称名せられた時、先生は氣も狂わんばかりに喜ばれ、幸吉さんの頭を撫でまわされて

「お浄土では母さんも、お祖母さんも喜んでくれるよ。

今度父さんが往く時にはお前は一番に迎えておくれ」と涙ながらに申されました。

たまさかに如來に面す春の風

とはその時の感銘の深い句でありました。

又次男の敏郎さんや、次女の愛子さんが念仏申されるようになられた時も同様でありました。

以上は御子様方の上に現われたことでありますが、それは同時に、先生に接する老少善悪、智愚貴賤を問わず、一切有縁の人々の上にも念じつづけられました。

「池山においては、ただ念仏して……」

行き／＼たおれふすとも萩の原

と芭蕉の弟子曾良が詠じて居りますが、それというのも芭蕉翁が萩が大好きであつたところから、翁亡きあとに、一面の萩の原に出て、「たおれふすとも」翁の心の中であるとの心と受けとられます。

私はまた、明日の日は如何ようあれ、「ただ念仏」の慈懷の中に「たおれふすとも」の妙味を頂いて居ります。

秋の彼岸の前に

正信偈私解

— 序記親鸞聖人の生涯 —

白井成元

祖聖は越後から常陸に移られた。如何なる事情によりて

移られたのであるか、之に答える確かな資料は見出されないうである。それは恵信尼の生家三善氏が常陸に何かの縁をもつていたの由るからであろうと言われ、又は、越後から常陸の方へ集団的に移住した貧しい農民たちの群の中に居られたのであらうと言われたりする。いづれも学者

の臆測であつて、定説は存しないようである。

その移られる旅の途中の事であろう。建保二年、御齡四十二の時、衆生利益のために、浄土三部經千部誦願の願を發し、四五日行われた後に思いかえして之を止めてしまわれた、という事があつた。それを十七年の後、寛喜三年、御齡五十九歳の時、風邪の熱に冒された際、無意識に大經

を誦しておられた事の反省から憶いおこして語られた。
惠信尼消息の委しく伝える所である。之については本誌十一月号に私解をしるしたので今は略く。

惠信尼消息はまた、其の年月を詳かにしないけれども、常陸の国シモツマのサカイの郷という処におられた時に惠信尼のみられた夢を語つておられる。其はあまねく知られたように、法然上人を勢至菩薩の化身、善信房を観音菩薩の化身と仰ぐ純情の結び出でたるもの、其の消息をくりかえし誦していると、惠信尼という御方の深い信と清らかな徳とがおのずから浮びあらわれて、ゆかしさ限り知られぬものがある。上に掲げた親鸞夢記の理想がこゝに現実に映り出でている。今其の文を掲げること略する。

さて越後に於ける祖聖は概ね流誦の罪人として孤独に沈潜し聖教の研鑽にいそまれる事の方が多かつたであろう。既に常陸に遷られた後の御生活は如何であられたるか。越後にありて既に罪を免されたのであるから、其の後は公の身分としては復び「僧」として立つ自由をもたれたであろうし、随つて公にはばかるところなく教を伝える活動にも従われたであろう。上に述べた↓衆生利益のために経を誦むという執心が、名号の益を身に証し他に伝えるという他力の念佛に攝め入れられた事の信経験の深ま

其と共にこの間に「教行信証」の著述の稿の進められた事も亦吾が民族の精神史の上に不朽の歩の印せられた事であつた。いうまでもなく「教行信証」は祖師親鸞聖人の第一書であり浄土真宗の根本聖典である。其の内容については後に窺うとして、其の製作についてここに些か省みておきたい。

然るに「教行信証」製作の問題については古くから学者の間に諸の見解があり、殊に近年は、其の真筆稿本の印影版の刊行と共に筆跡用紙等の検討と相待つて各巻の書かれた前後等に関してまで厳しい研究の成果が多く示されている。私はそれら諸学者の発表について知る所よりも知らない所の方が遙かに多いので、之について啄を容れる資格をもたない者である。ただ私としては「教行信証」六巻を其が現に完成されたものとして伝えられている一聖典として其の意義を窺うところに思い出される二三の事を記しておきたい。

化巻に上(法華)に掲げまいらせたまつた三願転入の経歴を言け
たまつた文に続いて正像末三時の旨際を示したまう。中に
言わく

「三時の教を按ずれば、如来の般涅槃の時代を勘ふるに、
周の第五主穆王の五十一年壬申に当れり。其の壬申より我が元仁元年甲申に至るまで二千一百八十三歳な

りにつれて、念佛弘通のおん願いが愈よ切になられたであらう。それは東国の農民の、文字をも知らぬ、愚痴きまわりなき、あさましき人々を苦惱の中に入りこむ事のかさなるにつれて、愈よ新たに燃えたとされたであらう。

御伝鈔(下第二段)に、「聖人、越後国より常陸国に越えて笠間郡稻田郷といふところに隠居したまふ。幽棲を占むといへども道俗跡をたづね、蓬戸を閉つといへども貴賤にあらざる。佛法弘通の本懐こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す。聖人おほせられて曰く、救世菩薩の告命をうけし古の夢すでに今と符合せりと」と記してあるのは既に本願寺聖人として理想化された表現となつていのおもむきが感ぜられるけれども、然し祖聖の常陸時代をしのびおもしろいまいらせると、このような表現を自然にあらしめた現実が行われていたと思つて宜しいであらうし、御伝鈔の次の段にあらわれてくる明法房の廻心の事の如き、祖聖のおん面影をまのあたりに偲ばしめる記録である。

常陸に在らせられたのは御齡四十二の頃から凡そ二十年ばかりの間であつたらうと推測されている。この廿年の間に祖聖の徳の流れるところ念佛もうす人々の教団がかなり広く諸方に結ばれて社会的にも注目される勢力となつてきたらしい事、後年の御消息の類を通して窺われる。

り

ここに三時を算うるに元仁元年を基準としておられるが、何故にこの年を基準とせられたのであろうか。これについては古くから諸説があり新しい研究者たちも種々の見解を示しておられるが、私は、元仁元年が法然上人の十三回忌に当るので、その年を記念せられたのであろうという古い説にいちばん心引れる。但し其故にとて直ちにこの年に六巻全部が今のように完成したのだと言うのではない。正像末の三時を分別して修道のための現代の意義をきびしく省みるについて先ず如来入滅の年時を明らかにせねばならない。而もそれを先師示寂の年をおもいだして算えるという事は遺弟の念として自然であらう。年時を勘えてみれば、先師も既に末法の時代の人であられた。聖道門の人々が戒律をいくらかましく論じ、浄土を欣ぶ人々の無戒の行状を責めたてても、それは時を省みない議論である、今の時の道も俗もよく己れの分を思い量らなければならぬ、先師の専修念佛の教こそ全く此の時此の機に應じたまえる如来の悲願を顕わし示したまうたものであつた、親鸞はこれによりて救われた、その先師の遺教を味わい、根本精神を末代に伝えることこそ遺弟の任務である、どうしてもこれだけの事は為し遂げておきたい——こんな御ころもちで時を算え筆を執つてゆかれたのではないであらう

元仁元年は祖聖の御齡五十二歳に當る。それより五年前の承久元年には専修念佛の禁あり、三年前の承久三年には時の三上皇の遠地に遷幸せしめたまえる變がおこつた。後の日に祖聖は當時を顧みて、

「さればとて念佛をとどめられさふらひしが、よにくせごとのおこりさふらひしかば、それにつけても念佛をふかしたのみて、世のいのりにこゝろにいれて、まふしあはせたまふべしとぞおぼえさふらふ。」

と書いておられる。この「念佛をとどめられ」の言は、「故聖人の御ときこの身どものやうく／＼にまうされさふらひしこと」という言と共に承元の法難を指されたものと推せられるが、それと共にまた承久の禁に遭いて憂いたまえる御心も偲ばれもうす言である。念佛が人を救ひ世を安んずる真実の道であるのに、其の理に味く其の教を禁めては、朝家の禍を招き民衆の苦難を増しつゝある時勢を見ては、念佛もうす身として黙していることは出来ない、況して他に比ひ稀なる厚恩を蒙つている事をおもうにつけても、どうしても念仏の真実義を世に明らかにせねばならない、先師の恩の厚きを仰ぎつつ、どうしても書き留めずにはおかない血涙の記録を綴りたまうたことであろう。元仁元年を基準として如來入滅の年を算えておられる事の奥に、法

かにすべき性質のものであつたであろう。それが師の十三回忌というおもいで深き年にあい、念佛禁止の痛ましい厄に復び遭うに至り、久しく自然に熟してきていた文類の組織を審かに慮りて完くし、以て広く世に伝えようと志したまうたのであろう。

だから元仁元年はそれまで私の備忘録であつたものを転じて公に世に伝うべき書と成すという確乎たる志の立てられた年であつたと思われる。それは常陸に遷られてから凡そ十年を経た時であり、そしてそれから又十年余り経に時に祖聖は常陸を去りて京都に帰りました。

祖聖が帰浴せられた動機の中に恐らく「教行信証」の完成の御願いが其の最も直接なるものとして存したのではあるまいか。阪東本の影印本を拝閲すると、多年に互る夥しい労作の跡がまざまざと窺われるが、それでも猶完全に成功し終つたとも思われざる辺があり、其の完成した相は清書本といわれる西本願寺本に於いて見られるようである。恐らく帰浴後の初の数年はこの「教行信証」の完成のためにささげられたのであろう。

(七月廿六日小庵にて)

然上人十三回忌を憶念したまうた記念を推測することは当然ではあるまいか。

いつたい教行信証のような大著が短時日の間にできあがる筈はない。(カントが「純粹理性批判」を著すのに十年の沈潜を要した。)吉水で学んでおられた頃の祖聖の不断的研鑽の驚くべきものであつた事は、現存の觀經小經の集註が之を証する。恐らくこの類の經論釈の鈔録こそ越後にあられた日々の無上の慰めであられたであろう。越後に於いて新たに書籍を得られたか如何か、恐らくそれは殆んど不可能か又は極めて稀なことであろう。常陸に遷られてから足利文庫や金沢文庫によりて書籍に触れる機会はあられたらうと思われるが、それにしても現在する此の書のやうに夥しい經論釈の鈔文の類輯が如何にして成されたのであろうか。私はひそかに思う、吉水時代の鈔録類が越後時代にくりかえし読まれ味わわれた。常陸に於いて其の味読が愈々深まりたまうにつれておのずから文類の組織が為されるやうになつた。それは經論釈の文を類に従つて輯め録し、之を証拠として選択集の根本精神を明らかにすることに注がれた。それはもと己証の備忘録とも称すべき意義のものであつたであろう、即ち先師上人から伝えられた専修念佛の真実義を、広く經論釈の之に照らして味わいつつ、世に行われる邪義異義等を批判して御自らの道を明ら

安心小話

一蓮院師曰く。

香存 1788 / 1860

香存院に傳ふ。

もうちつと気掛りなと思うは、まだ弥陀をたのまぬなり。落付かれぬ／＼と云うは、固より弥陀をたのまぬなり。落付いたと喜ぶも、弥陀をたのまぬなり。落付かれぬによりて落付こうとはりこむも、弥陀をたのまぬなり。

落付いたか落付かれぬかと試して見るも弥陀をたのまぬなり。なせなれば、これは我心を眺めて頼まんとしておるなり。方角を取りちがえておるなり。されば自力はすたりそうですたらぬものなり。かえすがえす我心を眺めず弥陀をたのむべし。

弥陀をたのむと云うは、本願の月に真向になりて、我心をながめぬことなり。

又曰く。

勅命を己が胸の裏まで持つて来るな。勅命のそのままて安心してしまえ。

同師、不倒翁を買はせられての仰せに、

幾度掘けても／＼起きあがるは中に仕掛があるからなり。後生のことにはすりこみ／＼する奴がかゝるものをと起き上がるは仕掛があるこぢや。

編集後記

一葉落ちて天下の秋を知ると古人は申しましたが、萩の花、虫の声、空の澄みの中に、天下の秋を感じる好季となりました。私共にとつては絶好のみのりの秋の訪づれであります。それにつけましても、赤尾の道宗を思い

「後生の一大事、一期を限り油断あるまじきこと」と生涯かけて、われとわが心に言いきかせ／＼して聞法にいそしんだ一筋の信の旅を偲ぶのであります。

それでは何か珍らしいことを聞いたのかと申すと、そうではなく同じことを何度きいても聞き飽きないという聞き方でありました。

それは何か「仏願の生起本来」であり「南無阿彌陀仏のいわれ」でありました。「われを一心にたのめ必ず救う」との仏の勅命でありました。

真実なものの声は何年きいても聞きあきるといふことはありません。聞き飽きて新しく珍らしいものを聞きたいというのは、自分が底のない教に底を

いれて、うわすべりするからでありましょう。心して見れば庭前の一本の古木も春は春のよそおい、秋は秋の風情、四季それぞれの面白さはつきぬものであります。まして仏のいきたおまことの滋味は日に新たに日に日に新たなひかりを恵まれることであります。いそ／＼と聞法の生活を続けた道宗の姿のいよ／＼仰がれる秋であります。

近角先生の「繫縛と解脱」の御講話は三回に分けて頂きます。私共の心の中に入りこんで下さり、そこに解脱の光輪をとどけずばおなじとの、周到にして綿密な慈語を存分に信味させて頂きましょう。

執筆者御住所

東京都調布市仙川町七九四番地 福島政雄
京都市右京区山田葉室町一三番地 白井成允

東京都右京区山田開町 浄住寺

神原徳平

御案内

毎月、第一、二、三日曜午後一時半。日曜例会。南区駈上町二、一道会館。市電新郊通一丁目下車

毎月廿四日、午前午後。法話会

昭和区小椋町、教西寺。市電御器所通下車
九月十七日、中川区南陽町船頭場。西川氏宅法話会。

九月廿五日、岡崎市藤川町、光和会、午后。

九月廿七日四日市々大矢知、真西寺、午后。
九月廿八日、中川区岩塚町、林高寺、午前

十月二日、午前午後、一宮市岩倉町北口、証法寺。

定価 一部 二十四(送共)

半年 百二十円(送共)

一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中千種区千種町馬走二八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市中南区駈上町二ノ三八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番